

義父と嫁

第三卷

淫らな嫁からの卑猥なプレゼント

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 嫁に与えられた新たなミッション

■ 第二章 親戚の結婚式に破廉恥な衣装で出

席する嫁

■ 第三章 親戚の前で露出狂呼ばわりされる

嫁

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 最新作の出版情報や、そのほか各種コ
ンテンツ情報などを配信。

<https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/>

■ 著作権について

「義父と嫁 第三卷 淫らな嫁からの卑猥な
プレゼント」(以下本書と表記する)の著作
権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、
及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し
た場合を除き、本書の一部、または全部を、
あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファ
イル、ビデオ、テープレコーダー)により複
製、流用、転載、転売することを固く禁じま
す。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第
61条などの罰則がありますのでご注意ください
い。

■ まえがき

夫が単身赴任中の環奈は、同居する義理の父、勇蔵と義理の姉、美奈子に恥ずかしい弱みを握られ、彼らの意のままにその若い体を弄ばれ、辱めを受ける日々を送っていた。

そうして、カメラが趣味の勇蔵にヘアヌード写真集を製作されてしまった環奈は、今度はまた勇蔵の望みでカレンダーまで作ることに決まったのだった。

そんな中、美奈子や夫の正彦の従姉妹の結婚式が行われることになり、勇蔵達と共に披露宴に招待された環奈は、そこでカレンダー用の撮影を行うと勇蔵から告げられる。

親戚の結婚式の前日、美奈子から披露宴に着ていくドレスを渡され、それを見て愕然とする環奈。

なんと、それはノースリーブのタイトなワンプールスで、環奈がそれを試着すると下は股下五センチほどの短い丈で太股が丸出しにな

り、上は胸元部分が大きく開いていて豊満な
 胸の谷間が露わになってしまった。
 さらに、ワンピースは淡いピンク色のレ
 ス生地になっていて、所々に施された刺繍部
 分以外は肌が透けて丸見えになってしまっ
 いたのだ。
 「ああん、恥ずかしいです。・・」
 ドレスを試着した環奈は、ワンピースから透
 けた乳輪や恥毛を見て羞恥に全身を震わせ
 た。「お願いです。・・この衣装だけは勘弁して
 ください。・・」
 ある嫁の願いが聞き入れられることはな
 かった。
 親戚の結婚式当日、披露宴会場のあるホ
 ルに勇蔵達と一緒にやって来た環奈は、久し
 ぶりに会う夫の親戚達と挨拶を終えると、
 よいよ披露宴会場に入ることになり。・・。
 入口で係の女性からコートを脱ぐよう促さ
 れた環奈は、暫し戸惑った後、ついに纏っ

いるコートを脱ぎ、その破廉恥極まりないドレス姿を晒したのだった。
「ちよつと見て。あの人、凄いい恰好よ。オッパイもお尻も透けて見えているじゃない。恥ずかしいわねえ」
「ヤダあ、アソコの毛も見えてるわよ。信じられない。あんな恰好で結婚式に来るなんて一体どういう神経しているのかしら」
「あの人、親族の席に座ったわよ。有紀にはあんな露出狂の親戚がいたのね」
場違いな恰好の美女が会場に現われると、新婦の友人の女性達は、環奈の方に軽蔑の視線を向け罵った。
「おい、あの美女ほとんど裸みたいな服着てるぞ。まったくたまんねえな」
「あんな見世物が見られるなんて、今日は本当にめでたいな。せっかくだから、たっぷりと目の保養をさせてもらおうぜ」

新郎の友人の男性達は、女性達とは対照的に厭らしい笑みを浮かべ、環奈の方にギリギリした視線を投げ掛けた。
そうして、好奇と軽蔑の視線を一身に浴びながら親族の席に座った若嫁は、これから想像を絶する羞恥地獄が待ち受けていることをまだ知らなかった。

■ 第一章 嫁に与えられた新たなミッション

今夜もいつものように台所で夕食の準備をする環奈の姿があった。その美しい体には何も身に着けておらず、乳房もお尻も恥毛も丸出しの姿で包丁を握り野菜を切っていた。台所から響くまな板の上を包丁が叩く音は、どこか物悲しく聞こえ、今の環奈の心情を表しているように思えた。

同居する義理の父、勇蔵と義理の姉、美奈子に恥ずかしい弱みを握られている嫁の環奈は、彼らの意のままにその若い体を性玩具として弄ばれ、毎日のように辱めを受け続けていたのだった。

先日カメラが趣味の勇蔵に家の中や庭でヌード撮影をされ、恥部までが露わとなったヘアヌード写真集を作られたばかりであった。一体こんな生活がいつまで続くのか、単身赴任中の夫はいつ家に戻ってきてくれるのか、

なにも分からないまま、環奈は今日も不安と
 戦い、羞恥に喘ぎながら義父や義姉と食卓を
 囲むことになった。
 「環奈さん、こないだの写真集はどうだった
 かな？どの写真も良く撮れていただろ？」
 勇蔵は写真集を完成させた日から毎日のよう
 に環奈に同じ質問ばかりしていた。
 「は、はい・・・とっても良く撮れていまし
 た・・・あ、ありがとうございます」
 いつもと同じ返答をする環奈の顔はほんのり
 と紅く染まり、羞恥に塗れているのがはつき
 りと分かった。
 「環奈さんて、顔に似合わずアソコの毛が濃
 いから、けっこうワイルドな写真ばかりだっ
 たわよね（笑）」
 美奈子がそう言って笑うと、環奈は顔をさら
 に紅く染め、作り笑いを浮かべて誤魔化すし
 かなかった。
 勇蔵が撮影し作った環奈のヘアヌード写真

ずかしくてまだ全てを見ることはできてい
なかった。こんな写真集をもし単身赴任中の夫
に見られたら、離婚を切り出されても仕方な
いように思えるほど、環奈にとってそれは一
生の汚点とも呼べる代物であつたのだ。
「環奈さん、今度はアンタのカレンダーを作
らせてくれないか？」
勇蔵は不敵な笑みを浮かべながら、環奈にそ
う問い掛けた。
「それは良いわねえ。カレンダーだったら家
の中に飾っていつでも見られるし、面白そう
だわ」
美奈子は勇蔵の新たな企みにすぐに賛同し、
同じように不敵な笑みを浮かべた。
「えっ・・・」
環奈は小さく驚きの声を漏らすと、怯えた表
情で二人の方を見つめた。
写真集だけでも恥ずかしくてたまらないの
に、さらにカレンダーまで作られて家の中に
飾られたら、とても生きた心地がしなかった

環奈は二人に継るような目を向け、暗黙の内に断ろうとしたが、それは却って二人の加虐心を煽る結果になり、夕食のテーブルで環奈のカレンダーを作ることにがあっさりと決まったのだった。

それは環奈にとって新たな羞恥劇のはじまりを意味していた。そして、運命の悪戯か、その羞恥劇にはおもいがけない舞台が用意されることになった。

環奈の夫、正彦と義姉、美奈子の従姉妹が結婚することになり、その結婚式が来週行われることになっていたのだ。単身赴任中の正彦は仕事のため残念ながら結婚式には欠席するることになっていて、環奈は勇蔵と美奈子と一緒に出席することになっていたのだった。

そして、あろうことか勇蔵と美奈子はその親戚の結婚式の場で環奈を辱め、カレンダーの撮影をしようと企んでいたのだ。

親戚の結婚式を翌日に控えた日の午後、勇蔵と美奈子は環奈をリビングへと呼び出した。「環奈さん、明日の披露宴に着ていくアナタの衣装なんだけど、こっちで用意したから今ここで試着してみてくれるかしら」美奈子はそう言うのと、環奈に紙袋を差し出した。「分かりました・・・」美奈子から強引に紙袋を渡された環奈はそれを受け取ると、恐る恐る中身を確かめた。「えっ・・・」紙袋の中に入った衣装を取り出した環奈は思わず驚きの声を漏らし、手に取ったそれを咂然とした表情で眺めた。「さあ、早くここでそれを着てちょうだい！意味深な笑みを浮かべた美奈子がそう言っただけで、環奈は小さく頷き、手に取った衣装を裸の体に纏っていた。家の中ではいつも裸でいることを義務づけられていた環奈は、どんな衣装であれ体を隠

す事ができるならそれで良かった。しかし、
環奈が身に纏った衣装は、体を隠すことさえ
ほとんど叶えられていなかったのだ。美奈子
に渡された衣装はノースリーブのタイトなワ
ンピースで、下は股下五センチほどの短い丈
で太股が丸出しになり、上は胸元部分が大き
く開いて豊満な胸の谷間が露わになっていた
。そしてなにより、ワンピースは淡いピンク
色のレース生地になっていて、所々に施され
た刺繍部分以外は肌が透けて丸見えになって
しまっていたのだった。それはある意味、裸
よりも恥ずかしい恰好と言っても良かった。
ああん、こんなにあんなに乳輪や恥毛を見た
から透けて丸見えになった乳輪や恥毛を見た
環奈は、激しい羞恥に喘いだ。
「環奈さん、サイズもピッタリで良かったわ
アナタのスケベな体がより強調されてとって
も素敵よ（笑）」

美奈子は想像以上にセクシーな環奈の姿にす
っかりご満悦な様子で、わざと羞恥心を煽る
ような言葉を投げ掛けた。
「確かに良く似合っておる。これだと環奈さ
んが結婚式の主役になっってしまうんじゃない
か（笑）」
勇蔵は、嫁のあまりに卑猥な姿に興奮を抑え
きれない様子で、そう言っつてワンピースから
透けた環奈の肌を食い入るように眺めた。
「ああん、恥ずかしいです・・・」
環奈は、衣装から透けた乳輪や恥毛に二人の
視線が突き刺さるのを感じると、慌てて両手
で胸元と股間を隠した。
「環奈さん、後ろも見せてくれるかしら」
美奈子がそう言うのと、環奈は恨めしそうな表
情で義姉の方を見た後、ゆっくりと後ろを振
り返り、二人にお尻を差し出した。
「オオッ、こりや凄いい、スケベなお尻がよ
り厭らしく見えるわ（笑）」

勇蔵が感心した様子で、その声を漏らすと、環奈は恥ずかしくて堪らず、思わずお尻を左右に振り乱した。
「これだと確かに環奈さんのスケベなお尻が結婚式の注目の的になりそうね（笑）」
美奈子は相変わらず満足そうな表情を浮かべたまま、レースの生地から透けた環奈の形良いお尻を眺めた。
二人が言うように、環奈のお尻は割れ目の一部が刺繍で隠れている程度で、ほとんど丸見えになっていた。当日も環奈はおそらく下着の着用を許さないはずのため、この恰好では披露宴に出席する全員の注目の的になるのはほぼ間違いないかった。
「環奈さん、どう嬉しい？」
美奈子は、目の前で半裸姿のまま羞恥に震える環奈をいたぶるように問い掛けた。
「お願いです・・・この衣装だけは勘弁してください・・・」

環奈は、さすがにこの破廉恥極まりない衣装で親族が一堂に会す披露宴の場に出向くことは憚られ、二人の前で頭を下げて許しを乞うた。
「環奈さん、自分の立場を忘れたのかな？ 美奈子がせっかく用意してくれたんだから、黙ってそれを着て行きなさい」
勇蔵がそう諭すと、美奈子も追い打ちを掛け、
「環奈さん、明日の結婚式に正彦は来ないんだから、安心して親族の皆さんの見世物になりなさい」
勇蔵と美奈子の二人が冷たくそう言い放つと、環奈は顔を上げ、恨めしそうな表情で二人を睨みつけた。
私を親族の前で見世物にするなんて酷過ぎるわ・・・一体どこまで私を辱めれば気が済むのよ。環奈は心の中で二人に向かってそう強く訴えかけたが、二人にそんな気持ちが届

くはずもなく、ただ唇を噛みしめながら恥辱に耐えるしかなかった。その夜、環奈は自分の部屋でもう一度美奈子から渡された衣装を身に纏い、部屋に置かれた姿鏡の前に立っていた。乳首は胸元に施された刺繍で何とか隠れていたが乳輪は丸見えとなり、乳房の大きさや形まではつきりと分かった。そして下腹部に目を移すと、股間に施された刺繍の横から黒い恥毛が無数にはみ出て見えてしまった。ああん、こんな恰好で明日の結婚式に出席しなくちゃいけないなんて・・・。環奈は改めてどうしようもない羞恥に襲われ、不安と恐怖で朝まで眠ることができなかった。

■ 第二章 親戚の結婚式に破廉恥な衣装で出席する嫁

親戚の結婚式当日の朝、勇蔵と美奈子は結婚式のスーツとドレスにそれぞれ身を包み、出かける準備を終えようとしていた。そんな中、リビングの片隅で一人羞恥に身を震わせ、環奈の姿があった。

「環奈さん、何してるの？そろそろ出かけるわよ！」

美奈子が大きな声で呼び掛けると、環奈はまるでこの世の終わりのような表情で頷き、二人に付いて項垂れながら家を後にした。

その成熟した体には昨日美奈子から渡された淡いピンク色のレースのワンピースを纏い、下着を付けていなかったため、乳輪や恥毛、それに尻が丸見えになり、裸よりも恥ずかしい姿に仕上がっていた。さすがに、こんな恰好で外を歩くわけにはいかないため、披露

宴会場に着くまではベージュ色のコートを着ることを許された環奈だったが、それでも一歩外に出るとどうしようもない羞恥が込み上げ、歩く脚がガクガクと震えていた。

外は結婚式にふさわしい快晴の青空が広がり、環奈の心の内とはまったく真逆の清々しい陽気であつた。私、これからどうなつてしまふのかしら・・・。タクシーに乗った環奈はそんな漠然とした不安を抱きながら、窓の外景色を眺めていた。

実は、今朝家を出る前に環奈は美奈子からあるモノを渡されていた。それはワンピースのドレスと同じピンク色のリモバイで、今日の一日秘部の奥に挿入しておくよう命じられ、今、ドレスの奥に忍ばせていたのだった。

スキースケの破廉恥なドレスの中にリモバイまで挿入させられた環奈は、今日の親戚の結婚式で途轍もない辱めを受けるような厭な予感を怯え、すでに心臓は高鳴り始めていた。

お願い、どうか何も起きませんように・・・
環奈が心の中でそう祈り続けていると、いつ
しか披露宴会場のあるホテルへと到着した。
勇蔵と美奈子の後に付いてホテルの中に入
った環奈は、恥ずかしそうに俯きながら歩い
た。秘部に埋められたリモバイは歩く度に擦
れ、下半身にジワジワと刺激をもたらし、思
わず喘いでしまいそうになった。
そうして、ホテルの中を歩いていると勇蔵
達は今日披露宴を行う従姉妹の有紀の家族と
出会ったのだった。
「どうも、久しぶりだな。今日はおめでとう
「ご無沙汰してます。本日はおめでとうござ
います」
勇蔵と美奈子がそう挨拶をすると、有紀の両
親や妹は笑顔で久しぶりの再会を喜んだ、
「彼女は確か正彦君の奥さんだったね」
勇蔵の弟で新婦の有紀の父親である孝蔵は、
勇蔵と美奈子の後ろに隠れるように立ってい
る美女の姿に気がつく、そう声を掛けた。

「こ、こんにちは・・・環奈です・・・。本日
はおめでとうございます」
孝蔵に声を掛けられた環奈は慌てて恥ずかし
そうに挨拶をした。
新婦の有紀やその家族とは、環奈の結婚式
の時に初めて会ったきりで、今日はそれ以来
の再会だった。
「やっぱり美人だね。正彦君が本当に羨まし
いよ」
孝蔵が厭らしい笑みを浮かべながらそう言う
と、環奈は恥ずかしそうに俯いた。環奈は今
まで孝蔵達家族とはそれほど話しをしたこと
がなく、義父の勇蔵に似た雰囲気、孝蔵をあ
まり好きではなかった。
「でも、こんな綺麗な奥さんだったら、正彦
さんも単身赴任中に浮気されたりしないか、
心配なんじゃないかしら」
厭味の込められた口調でそう言ったのは、孝
蔵の隣に立つ妻の圭子だった。彼女は羨望と

嫉妬の入りに混じった鋭い眼差しで環奈を見つめていた。「確かに、こんなに美人だったら男の人なんて幾らでも釣れそうよねえ」圭子の言葉に被せるようにまたも厭味たつぶりにそう言ったのは、新婦の有紀の妹で美奈子の従姉妹に当たる瑞紀であつた。「こら、二人とも止めなさい。失礼じゃないか」孝蔵は環奈に対して嫉妬を露わにする妻と娘を注意すると、新郎家族との打ち合わせがあつた。からと言つて、勇蔵達の前から去つて行つた。久しぶりに再会した親戚家族から、まるで尻軽女のような目で見られてしまった環奈は、すでにこの場から帰りたくして仕方なかつた。あんな人達にコートを脱いだ姿を見られたら、一体どうなるのかしら。もうすぐ乳房やお尻、それに恥毛までが透けたドレス姿を晒さなければいけないと思ふと、環奈の心臓

の鼓動はさらに激しく高鳴り、胸が張り裂け
そうになった。
それから、勇蔵達は披露宴に出席する他の
親族達とも久しぶりの再会を果たし、挨拶す
ることになった。彼らは皆、勇蔵と美奈子の
後ろに隠れるように立っている美女の存在に
気づくと、意味深な笑みを浮かべ環奈の方に
挨拶をした。こんなめったにお目にかかれな
いようなスーパー美人が親戚の中にいること
を皆誇らしく思うと同時に、男性は淫靡な欲
情を滾らせ、女性には嫉妬の炎をメラメラと燃
やしていた。
親戚達との一通りの挨拶を終えた勇蔵達は
いよいよよ披露宴会場へと移動することになり
美奈子は環奈に向かって不敵な笑みを浮かべ
た。
「さあ環奈さん、行くわよ」
美奈子はそう言っ環奈の腕を掴むと、哀れ
な嫁は引っぱられるように会場へと連れられ
て行った。

会場への入口にはホテルの従業員が立っ
て、披露宴出席者の手荷物やコートを預か
ていた。
「お客様、こちらでコートはお預かり致し
ます」
女性従業員がそう言って環奈に声を掛けて
ると、美奈子はサッと環奈の元から離れ、
人嫁の様子を遠くから窺うことにした。
「えっ・・・」
環奈は驚きの声を漏らすと、暫しその場で固
まっていた。周りは他の出席者達が手
荷物やコートをホテルの従業員に渡してい
る姿があり、コートを纏っている環奈もこ
そそれを脱いで従業員に渡すのは何も特
別なことで
ではなかった。
しかし、コートの下に破廉恥極まりな衣
装を纏っている環奈にとって、ここでコ
ートを脱ぐのは裸になるのに等しく、恐
れていた瞬間がっいにやって来た事に脚
の震えが止ま
らなかった。

「お客様、どうかされましたか？」
女性従業員は、酷く怯えた様子の環奈を怪訝な表情で眺め、問い掛けた。
「ご、ごめんなさい・・・」
環奈はなんとか平生を装うとしたが、なかなかコートに手を掛けることができなかった。
するとその時、突然秘部に埋められたリモバイが鈍いモーター音を奏でて振動し始めたのだった。
「ああん、いやああん」
環奈は堪らず苦悶の表情を浮かべ喘ぎ声を放って下半身から崩れ落ちそうになった。
「お客様、大丈夫ですか？」
環奈の異変に驚いた女性従業員は、慌てて環奈の体を支え、心配そうに問い掛けた。
「ああん、だ、大丈夫です・・・ああん」
環奈は腰を振りながらそう答えると、咄嗟にリモコンを握っている美奈子の姿を探した。
ああん、止めてください・・・少し離れた場所から不敵な笑みを浮かべてこちらを見

ている美奈子の姿を見つけた環奈は、縋るよ
うな目を向け心の中で必死に訴えかけた。す
ると、美奈子は両手を使ってコートを脱げと
いうジェスチャーを見せたのだった。ああん
そんな・・・自分がかここでコートを脱げば
バイブの振動を止めてくれるのだと悟った環
奈は、不敵に微笑み美奈子の顔を恨めしそう
に見つめた。
ああん、分かったわよ・・・コートを脱げ
ば良いんでしょう。そんなに私を辱めたいなら
皆の見世物になってあげておもしろい、バイブの
振動から逃れた一心中で、おもいきってコー
トを脱いだのだった。
「キャッ」
環奈がコートを脱ぐと、女性従業員はコート
の中から露われたあまりに破廉恥なドレス姿
を見て小さな悲鳴を漏らした。そして、その
声に振り返った他の出席者達も環奈の衣装に

気づくと、皆哑然とした表情を浮かべてその姿を見つめた。
いやあん、恥ずかしい・・・。周りにいる全員の熱い視線を体中に浴びた環奈は、女性従業員にコートを預けると、両手で胸元と股間を隠しながら逃げるように会場の中へと入っていったのだった。

■ 第三章 親戚の前で露出狂呼ばわりされる嫁

披露宴会場にセクシーな衣装を身に纏った美女が現われると、その姿を目撃した一部の人々の間からは悲鳴や唸り声が漏れ、会場の一角は俄にざわついた。
「ちよつと見て。あの人、凄く恰好よ。オツパイもお尻も透けて見えているじゃない。恥ずかしいわね。」
「ヤダあ、アソコの毛も見えてるわよ。信じられない。あんな恰好で結婚式に来るなんて一体どういう神経しているのかしら。」
「あの人、親族の席に座ったわよ。有紀にはあんな露出狂の親戚がいたのね。」
新婦の友人の女性達はその囁き合いながら、環奈の方に鋭い軽蔑の視線を向けた。
「おい、あの美女ほとんど裸みたいな服着てるぞ。まったくたまねえな。」

「あんな見世物が見られるなんて、今日は本
当にめでたいな。せつかくだから、たっぷり
と目の保養をさせてもらおうぜ」
新郎の友人の男性達は、女性達とは対照的に
厭らしい笑みを浮かべながら、セクシーな衣
装に身を包んだ環奈の姿を拝んだ。
そんな中、一番驚愕の表情を浮かべ環奈に
熱視線を向けていたのは、親族席に座る者達
だった。新婦の家族である孝蔵達は啞然とし
た様子で環奈を見つめ、特に新婦の母親の圭
子と妹の瑞紀は、家族の大切な祝いの席で破
廉恥極まりない恰好をする環奈を厳しい表情
で睨みつけていた。
ああん、私みんなに見られてる・・・恥ず
かしい。親族席に座った環奈は羞恥に顔を紅
く染め、俯いたまま体を震わせた。
「環奈さん、随分と大胆な衣装ね。オッパイ
が透けて見えているわよ」

羞恥に震える環奈に対し、そう声を掛けたのは環奈の左隣の席に座る勇蔵の妹の小百合であつた。

「ご、ごめんなさい・・・」

環奈は、小百合のストレートな言葉に羞恥心を煽られ、震える声で謝つた。

すると、環奈の右隣の席に座る美奈子が二人の会話に割つて入つた。

「叔母さん、本当にごめんなさい。ここだけの話なんだけど、実は環奈さんは露出狂なのそれで自慢の体をみんなに見て貰いたいつて言つて、今日はこんなドレスを着てきたんですよ。私達は恥ずかしいからやめてつて言つたんですけどね、環奈さんが全然言うこと聞いってくれなくて・・・私達も環奈さんの露出癖には本当に困つていますよ」

なんと、美奈子は平然とした口調で、環奈が露出狂であるという全くデタラメな話をしたのだつた。

「エッ、そうだったの！全然知らなかったわ。清楚なお嫁さんだとばかり思っていたのに、やっぱり人は見かけによらないのねえ」小百合は酷く驚いた様子で口に手を当て、スケケワンプースを身に纏った環奈の姿を意味深な表情で眺めた。

「私、そんなんじゃない。ああん」自分が露出狂だという美奈子のデタラメな発言を、小百合がすっかり信じ込んでいるのに慌てた環奈は、思わずそれに反論しようとして言葉を発しようとしたところ、突然それは喘ぎ声に変わり、艶めかしい表情を浮かべて悶え始めたのだった。

「ちよつと、環奈さんどうしたの？大丈夫？小百合は、隣の席で急に変な声を出して下半身を揺らし出した環奈に驚き、心配そうに声を掛けた。

「だ、大丈夫です。ああん」環奈はなんとか平生を装うとしたが、半開きになった口からは喘ぎ声が漏れた。

突然の環奈の異変にも美奈子は全く動じる様子もなく、面白そうにその姿を眺めていた。テーブルの下に隠れたその右手にはバイブのリモコンがしっかりと握られ、それを今操作していたのだ。環奈は必死に快感に耐えながら、右隣に座る美奈子の方に縋るような目を向け、暗黙の内に許しを乞うた。お願いです、バイブを止めてください。・・。環奈が心の中で叫ぶ声は、美奈子にもしつかりと伝わっていたはずだが、美奈子はなかなかバイブを止めようとしなかった。そして、涼しい顔で環奈に向かって問い掛けたのだ。環奈は、露出狂冥利に尽きるわけでもないなにご自慢の体を見られて嬉しいでしよう？

「環奈さん、今日は露出狂冥利に尽きるわけないから、美奈子の姿を見た環奈は、その時、どうかすればバイブの振動を止めてもらえるのか」となく悟ったのだ。

「は、はい・・・ああん・・・嬉しいですよ」
環奈は少し躊躇った後、震える声で美奈子の
問い掛けにそう答えた。
すると、環奈の予感通りに秘部の奥で蠢い
ていたバイブの振動はピタッと止まったのだ
った。良かった・・・。環奈は少しホッとし
た表情を浮かべると同時に何とも言えない恐
怖に苛まれた。バイブの振動が止まったのは
環奈が嘘でも自ら露出狂であると認め、美奈
子の望む振る舞いをしたからに違いなかった
つまり、ここでは美奈子の奴隷として彼女の
望み通りの振る舞いをしなければ、秘部の奥
に埋まったバイブを振動させられ、下手をす
ればイカされるかも知れないと思い知り、環
奈は他の出席者達に例え変態だと思われても
自分を押し殺して振る舞うしかないと言
決めたのだった。
環奈が露出狂であることを認める発言をす
ると、小百合は今度は呆れた表情を浮かべ、

遠慮なくその破廉恥なドレスから透けた乳房
や、下半身に生えた黒い茂みを眺めた。
「環奈さん、アナタ露出狂なんだったら後で
前に出てみんなにその体を良く見て貰えばいいわ」
小百合が意味深な笑みを浮かべながらそう言
うと、環奈は顔を真っ赤に染めたまま作り笑
いを浮かべて誤魔化すしかなかった。
そうして、結婚披露宴はついに始まり、環
奈はなるべく目立たぬよう親族席に静かに座
っていった。元々、親戚である環奈は前に出て
新郎新婦に向かってスピーチをしたり、歌つ
たりするようなことはなかったもので、このま
ま披露宴が終わるまでの間、自分の席でじっ
としていれば、何とか無事にやり過ごせるは
ずであった。どうかお願い、早く終わっ
て・・・。環奈はドレスから透けた体をさり
げなく手で隠しながら、心の中でずっとそう
祈り続けていた。

しかし、環奈の祈りはおもしろいがない形で
脆くも打ち砕かれることになった。それは新
郎の友人達数名がスピーチをしている時のこ
とだった。すでに泥酔している彼らは酔っ払
いながら下ネタ話を繰り返して、新郎新婦は苦
笑いを浮かべ、他の出席者達も冷ややかな目
で彼らのことを見ていた。
「それではここで一曲歌いたいと思います」
す！でも、やっぱり俺達みたいな野郎が歌う
よりも、綺麗な女の子の人が盛りが上が
ると思うんで、親族席に座っている美人のお
姉さん、前に出てきてくださーい！」
彼らの一人がそう大声で叫ぶと、他の新郎の
友人達が環奈の席の方に近づいて来て、環奈
の両腕を掴み強引にステージまで引っ張り出
したのだった。
「キャッー、やめてください！」
環奈は必死に抵抗したが、男数人がかりで体
を掴まれてはどうすることもできず、あつと

いう間に披露宴会場のステージに立たされたのだった。　「キャッー、何よあの恰好！ほとんど裸じゃ　ない。最低！」　「厭らしいわねえ。あんなオツパイもアソコ　の毛も丸見えの服着て、新郎新婦に失礼だと思わないのかしら」　破廉恥な衣装に身を包んだ環奈の姿を今日初めて見た女性達の間からは罵声が響いた。　「オオッー、すげえ！美人のあんなセクシーな姿が見られるなんて最高だぜ！」　「なんだよあのエロい恰好、たまねえな！　環奈の姿を今日初めて見た男性達は歓喜の雄叫びを上げ、興奮した様子で下半身を痛いくらいに膨らませた。　「ああん、恥ずかしい・・・。ステージ上で披露宴会場に集まった全員の視線を一身に浴びた環奈は、あまりの羞恥に軽い目眩を覚え　た。」

「それじゃあ美人のお姉さん、ここで一曲お願いしまゝす！」

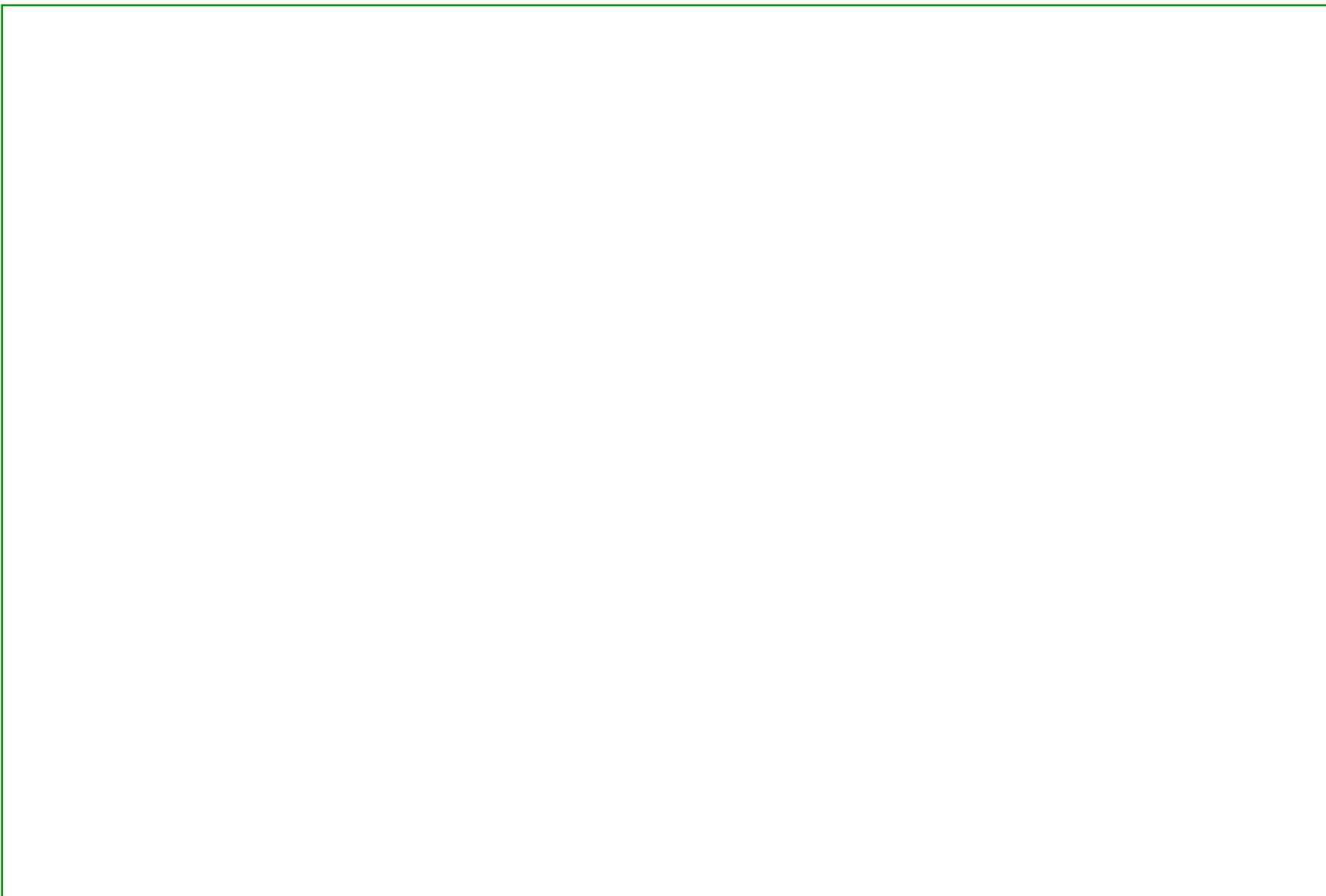
酔っ払った新郎の友人男性はそう言うど、マイクを強引に環奈に手渡し、手拍子を叩いて披露宴会場に集まった客達を煽った。

「そんな・・・」

まったく予期せぬ事態に環奈がいつまでも戸惑っているど、突然秘部の奥でバイブが動き出し、環奈は思わずステージ上で下半身を揺らし悶えた。

ああん、こんなの酷すぎるわ・・・。環奈は、秘部の奥で振動するバイブに美奈子からの無言のメッセージを受け取り、どうしようもない悔しさど下半身を襲う快感に唇をギューッと噛みしめた。

そうして、披露宴会場に割れんばかりの手拍子が鳴り響く中、秘部の奥で止まらぬバイブの振動に公衆の面前でイク恐怖を抱いた環奈は、ついに半裸姿のまま震える声でカラオケを歌い始めたのだった。



■ 海老沢薫 B L O G

<https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/>

・ ・ ・ 「羞恥」「露出」「辱め」をテーマとした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ そのほか SNS

https://x.com/ebisawa_K

https://www.instagram.com/kaoru_ebisawa/

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不祥事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>